華つみ

下局

暨七月十九日

中村俊定文庫
文庫 18
112
2

宮内省圖書寮

華摘

六月朔日　一灯礼　其の用述

自雪と星とまがうのうれやつ四士指
まがうと家と冷の氷餅　溪石

遊濟海寺

つるとの鴨といふ舟乃人の汗　治德

二日　所見

宮内庁書陵部

蛍ゆく宿の星の川辺乃涼ミ　角

蠅（バイ）集（たか）りのつく踏（ふまれ）て蛍哉　巳百

中暑乃ひるの掘り出を螢の飛　曲水（せい）

藻や魂なるべし川すゝこ　紫雲

蛍ひとゝ冬ハ恨んゆるさん　万四

三月

巴風亭

水うつるや蟬も雀を地ゝ寄　角

折るの蚊の色ゝ竹の隈　巴風

三ヶ月ゝ涼ゝしごゝ陽炎　溪石

うゝゝと底ゝ九ゝ三日の月　巳百

秋乃月脚を向まゝ

いつくゝゝを向まゝ

白川乃流ゝ今ハゆく蛍　同

遊女小むらさきを讃こゝろまれしゝ

四日

藻乃花や繪ゝ書ゝ色さゝ　角

涼しくゝと海ハ染ゝ日乃色　金鳳

髪かゝゝゝ草乃ゆゝ涼ハ　鉄蕉

白雨は乙狗笑乃楢うめ　鉄蕉

西行を目ゑ二つ辺ふじの雪　幽也

五月

祇園日次の記と

河簀垣徳利をひたし流す　角

箕山や滝と見うけて二曲り　曲水

六月

石山もまつ屋ゑ蟲　同

男めく一夜寢ぬん春の山　近江　とよ

祇園をとぶらふとて

松乃葉を青水晶の藤ゆ　角

七月

京都の祇園舍にて

鉾なのるゝ人のまゝなる朝哉　同

池暑茶の殼くさい俊枕ト宅

八月

鵲を乃ハゆきる屋乃暑ゆ　紫雪

毋乃月やそ又泣かまくい瓜　角

花つゝの中

その毋ゝ逆ぶるゝ蟬の声　僧　已百

憶子の

梨の花さくころを已が実のなるを　妓童　梨水

二月や海ぶ柿の木ハ子の通り　越人

翁よりの文の都の涼をこゝ

どもに見よとなりしもの文をて

那どゝ世へもきるがとゞて

丈山の住ひ所ハ涼ミ水　角

日の陰や蓮ハ葉ゝ代ハ二面巴山

我ものとよろこ鳴ものを　木平賣　同

書もこゝろ家の暑サ　氷花

九日

夕涼ミ似合ぬ僧の九ろう　竹井

もを替ゝ茶ともめし　池の雫

曲水の旅宿を訪ゝ

湖水をかゝひかしに

十日

蓮やの表をあゝ　角

やゝ草庵を

人ゝとゝきる

旬ハ鯛代ハ氷魚を　翁

法華一本門の心ハ

雨露ハ漏ぬ一ぬ花ハ雨　車論下　非人

麻ちとせとよりて句作結縁
まりたくしたい我毋の
追善とうくは句作遂げける
翁為眼且つ　こゝを忘れて
誰人いはれ花の色とせかし
しと未來記あらへ

十一日　ふの粉ふるひ乃扇うれ　角

十二日　夕藥師ふしきの誓願　同

十三日　軒天王を御旅所

十四日　星乃子ゝ宿宮（ミヤ）ふさまを鼓ち　同

十五日　蒲の穂や蠟を塵（やとし）ぬ　同

十六日　引汐乃動ぬ舟乃暑さ哉　百里

堀ゝ乃若を畳敷乃雫ち　妙延寺　乃可

十七日　城入せし時乃荒ち土用干　角

十八日　怖（フシロシキ）夢を見へ

切（ツ）し寺乃蓋ハ城乃蛋乃跡　同

衣食住乃三つハ何もう
らんしらんの草ね
茅食ハ安産のく食誤
〳〵 天命ハ御と
いへれども　山川

酸　ある酸を梅賣る老の洞の中
苦　蘇根堪るも世の味や路の蓬室
辛　井乃底の蛇を忘るゝ蔓いちご
鹹　百草の蔘乃実ぐくハ著
なりしく搖るや秋ノ海

十七月

炎天〳〵久方雲乃あるかぶ　角

環寡

蠹乃巣や千スぐぬる蟻乃人　達曙

蟬乃石る猫乃昼寝の暑ハ　寒蟬

十八月

抱筑乃妾うえくきのゝ角

次乃秋は結句不拘子の躍る　三井　笑種

京まいふら

犬蓼の柳泉こと五條ふま　舟竹

蠅ぶくりの杭乃眠うめ　巳百

伊勢の国すく狐の

人ようとこと云かけて句

仁あまとそとあやぐ木月

狐つき日比乃田丈すくくを

ゆくとき狐いすくなく玄竜

しくり狐すくくいきぐ分ら

あやしくくえめる定めしる

ともと才付作る

元禄元年七月の津

十九日

月出てくれぬるく涼水　角

紗乃切る螢つまん島祁山　筍深

何云て家のれぬるすて舟　枳風

十日

夕鳥や白き鶏垣根ら　角

時雨つるべをひきる

剃立のうつむる玄や竹の庵　曲水

餞別

難波江と

なしさはらくつ角出て濱の廿戸　路通

廿一日　市中の光陰ハこと
　　りくはいとゝしくさび

秋ゆくさら太鼓や隻　角

佛めくさくんかうの蓮の女　秋之

廿二日　惆農

燒鎌を背に暑し田刈　角

廿三日　煙雨村

夕ゝや洗ひ分けるる土のうる　角

しめるゝや炊く煙をうま作　面星

魚の腹白雨すぐ町屋川　遠水

廿四日

廿五日

廿六日　後ぐく後室よや
　　るきりぐのきこゝろ

あよ園のつのさはすひうる　角

不奪二百姓膏腴一とハ
文選のことゝ

百姓の志ぶる沖の一番船　角

木戸番を
あくれむ

蟬ひきけ一日啼て秋の露　同

蚊の声を悪(ニクム)と聞ぬ人ぞ　由之

炭釜の蚊の色じまるタ月哉　臺次

つまもとも勧(スヽメ)て色の極り　賤水

常袴とられぬ夏の亭　仙化

十七日　豊年一

十八日　雨中吟

ぬる味噌を沈る低夢　角

白雨の光さへ残る黄菊哉　友五

夕立る獨活(ウト)の葉の匂ひ　角

十九日

白くうつ
濱出ば

濱松の貝とる出汐(テハ)を聞ける　同

晦日

夏稼御師の箱札ぬる　同

物くさに花火かうまぬ涼さ　三井　笑種

木の下は蛍ぞ多し　蛍の月　莫陵

七夕のさらしてめしやかう衣　松風

心非心是

よしあしをいとて　定良

誉よよ若葉かな

う秋松原ゆく　鄉左

乃る人を其智覺るも涼かな

うゐを春の林や歳を築　防風

七月朔日

又の姿としきをんをと

ぬくやまうるはりぬるはり

いなみうるはしく含まびて

うれてはの句を中出きれい

一杯過る紅と心よりと

いよを告きりぬ感のあまり

ゆくを一杯をあ入しはる

秋といふ俺い身なるしむ藥かな　角

替てゆくゆ内井戸の月　定良

蕨の巣を立日より稲刈り終世　逸哉　松風

相撲のうしろ[illegible]　溪石

右九郎の[illegible]　嬢の足袋　角

[illegible]

二日

拭ひ筆より[illegible]一葉の　角

蛛来てゆらぐ桶の百合　亀翁

霧の風を心掛けのおぐり哉　遠水

そのかぎりを夕日を挑むけぶり　旦水

江山をことゆるぶる岩つ　金峰

卯花の乳母なる垣根　長崎　白義軒

三日　市隅

西側の灯籠なれやみの月　角

離婁之明

[illegible]兎の毛筆ほろ[illegible]　筍深

不[illegible]靴　高手　樊中

庭篁しづまりさびし追ふんかな　筍深

読大智度論

除かれしこころのつゆやみな白蓮花　同

一念

仲の露こぼまぬうちを千々の賀　同

四日

五日

六日

ちるこしまとちることせちしをいとはれと

七日

見あひや物ものびひろる脳の中　角

秋の雲をとはして

七夕や暮露すびへて笛をさく　同

時なるあめのうけ草や星の算　素見

名のつきぬ夫婦世ける天の川　仙化

蝙蝠子風かとふぼし祭　曲水

星あひや象ハ一つの葱畑　星東

めうつ星合の宿よりく有　青女

是会や人のうしろに衣着つ　溪石

第年を重ねて竈のもとべ
七夕月の孫ごしらへ
半やなるとやもれば言下

何くとも七色あるぐん　是祭　是吉

八月

三遷のかしこ色うつ慣ひて
七つとなるもの姪とるべ
つはせられ一月あるべ
七夕月　寄せりけれと
いとをしうして

文月や竈を文字と母の恩　角

題張氏隠居

金銀花氣をとしの秋の伶俐　麹尻

夕鄙や半開しの八つの鐘　同

小ぐ垢離や女の上乃ぬ笑　訓女

石山幻住庵八芭蕉翁
徜徉や所也しる佛
餉をよしとしとて

いつぬさて路の並木盛の清佛餉　星東

幻住庵山上

木啄の柱をつく伝乗の亀　曲水

山下水

物種よ小松ふ風しるけしもも　曲水
蟬乃ゑるよ爭ふ人ゑやザンザ降フリ　全峰
鵜とつれ鵜飼と眠る安めけり　氷花
蝉のよ扇よあする暑サ哉　石鼓

自畫讃

九日

いざ書て暑サ忘ん蚊しの壁　亀足
ゑ丸ふ法の列る物ゑ千破

十日

生霊（イキスダマ）酒のけぐゑぬ祝ゑ（フホチ）の姿　用
人のよいよく親秋の香　半夢（ヤマ山口）

海追曉雲

十一日

稲妻や朝曇（ヒケ）しる（出る）ゑ　角

花いうしみる（並ハ楊ト）
荷い分くゑの勞るうん
こうよい誠切ゑるゑうゑを

親とゑも法ゑ心や蓮賣　同

星合乃夕（ゆ）陳ーや比丘尼　御所　揚水

乳母や金とられて土蔵　臺次

十二日

義母義男灯籠よりて逝く　角

夏ぬると咲くはたの撫撫　遠水

十三日　南乳の其詞ありて

秋田の玉川は西も上人

の塩ばかりあらと詠しに

濁る井と名のなつかしき秋の雨　角

熊蜂のしたもの寒情の乳　興雪

落葉ゝく賤ハらとめよ業ハ　同

出羽の玉山とりの所も

山ちや人這うれ蕎ゝ　仙化

十四日　分郊原

みて森や分限ヲ見ゆる髑髏（ナレカウベ）　角

草村の飯いとるや蜂の巣　琴風

秋風や肉さへつるる髑　溪石

小蝶の出けるの穴　角

玉川を我聚英の句　童次

むまつまるゝ釣る帝帳　琴風

門並や箱挑灯い盆の中　溪石

妙絶な侍ん（ぬ）玉よりう　裴湖

十五日

んさくうせ迷ふ

蔦の葉の赤い色越を浪ぶ　角

荀子其辭富而麗

自然る夜の牡丹の花　揚水

孟子之文益而顯

白雲やら〳〵る〳〵山猫　同

揚子之語簡而奥

木かゝる斬の尾も長し　同

十六日　陀羅尼品

銀を罪入る稗や墓に　角

爪三年の面愁

元明八番出さ墓の苔　仙化

亡親之日

孝養施餓鬼　百里

地獄　落鄙や火振鳴めよ水の色

餓鬼　子と捨る長者の門やる灯籠

畜生　馬士も倒れ伏す赤の露

阿羅　辻くよる切らるる西瓜外

人道　変るもの身を恨べや生身魂

天道　稲妻乃ひらめく炎小袖乃

聲聞　秋風や桐くれぬ蝉の空

縁覚　蓮乃實や飛ぬものとなりぬ

菩薩　罹子い毋乃ふる里乃菩薩外

佛

十七日

髪ゆる男乃推つ立ち

ちげめるる

西瓜乃奴乃髪乃流れ　角

輪もんへく菜るこうしの竹　探泉

等木餅を文字なかき地る灯籠ハ　東ゝ

昼寝しへく夜とあてことは鶏鶏ゑ　同

十八日

つぼゝも見ぬ家あり庭の萩　角

形象もせいしき回り灯籠ゑ　星東

すもひとへく力くらべる童ハ　小僧　文松

宰人の肩とぐりもり秋の暮　近江　ゑめ

老僧をまたた冷ゆ辻せのゆく　戦竹

いろとをもうめハ我と後ゝり　東吹

子の日や酒りしあるゝ時の味　亀翁

たま掃なくるりや犬のつゝ　半夢

もくの掃除ハひとり柳ハ　同

泥ゑもて豆立ゑるゝ蛍哉　野徑

散花の張気もる春雀うゑ　同

鶴多を名案を恥なれ撲ハ　岩翁

番組

三番三　さもとこそ順ゆるめ華の酒　肅山
高砂　松の葉もとゝ目を度門の雪
頼政　いさきよく赤摘まるる茶水か
東北　春風の毋屋の泛むむ河雨の
五葉松　切込てゝ太刀の火とゝん岩の霜
三輪　泊瀬女と恋ふ送る蚊をか

三井寺　くるゝ花狂ふて春の月
老松　松梅や夫婦色恋する　神の庭

十九日　満百

ゝ風の月は成ぬり毋の乳角
我を又ひ泣ん秋の蟬笛深
蟬の涙ゝ諸虫も向ひ　東水
千鳥哉

追加　四月五日のなてしこ

七月廿一日ニ新三田忌なるこは
智海師をとむらひて墓誌
浅草ー誓願寺念佛ー堂

三人のなかる蓋し秋乃聲　角

月ー
三ともしも灯籠ー一つ也　松風

市中閑居

幕ーやよしーもしも

人ハ竹格子　角

閑興六哥仙

其角

ゆく水や何なりとても苔の味

籾乃茅舎の堀江枕橋　溪石

人色ーなるー風ふる　琴風

撿狭成乃けしの貝　角

さす月も輝く四間のまて也　石

蝶なとすつる扇　房花　風

数珠や獨(ヒトリ)詰念(コメ)振るる秋の雨　角

名女(ヲナメ)使の寺迄来待　丈

かく〳〵題なる方も讀(よまん)　風

借銭乞ハ酒なはなく　角

さて世ハ竜田の祢宜の　丈

又ゝの桜ゝ乃耳(コヒ)掃(はき)　色

狐着(ツキ)気る狐の角　角

紀写乃琵琶のあらぬ秋　丈

加(ハリ)るの番なおるる雪の中　風

其血(ハリ)ゝ一節ゝ芝　角

我ハ身て金拾ひる花の陰　丈

二日の夜る成(ナル)雛町　風

疑鶏(トリ)乃田仝相撲をなる　角

土器　係る撞(ハリ)破るの影　丈

汚墓への道こしら(ゑ)ゝ悲(まれ)　風

妹ゝ移ひ○や貧(こう)しよ　角

垢離場ちりなる者告くる人の縁　石
[illegible]　[illegible]
老楽の本卦とりぬれば　角
いでそしたとうよ勝俗羅　石
礒の月何観進るまる船　風
秋の渦まくく上鵲乃衣　角
むの内る泣るみち天津彦　石
まりいるゆるそ勘當　風

老功をあさひ祝の軍　角
霜乃八まれよりむ鳧（バス）　石
冬の倡の州のむもくと　風
せそ言延をうつる鼓斗（ハと）鎌　角
すり針や近江の海色見ぬて　石
着やるる迄八木曽の麻衣　風

はべり

石山幻住庵を
いとまもらひて

郭公背中見てやれ楚藤の姥　曲水

雅なよ山をつゝむ春の草　其角

狩人のつきくりまはし飛もとりよ　馬峯　同

急雨かつゝ味を志ほる冷食　水

春よしと隣をとりしお借屋　同

年ハ此様　大嘗會之　首

賜はしるる田舎うたて　水
子の自とらる母の餅はく　角
鏈物乃至のかしたとえ敷る　水
七つ捷むす菩提所のうら　角
[illegible]二つのけさる其ハ　水
花の都を田舎也　角
吹汁まつ徒ちりや横朝　水
舅の仗とれもるとうまき　角

高麗の馬より下る番代り　水
いつ明る風ふいとく蕨　角
[illegible]人なる酒買つ[illegible]　水
さてすいり身をほうく居る也　角
[illegible]る藝者[illegible]　同
業をさてこそ簾中の秋　水
山意を見合魚と行平　角
[illegible]る額のうちえぬ氣の毒　水

居士号る衣い濃く袖の色　角
六浦の海の曙の見　水
くめつくる海苔を拾をひろい　角
見日乃奈具足うん地　水
何者乃ひろとしるる屋　角
つなもしくさ〻富士の白雪　水
月新を鳥の実や成ぬん　角
弦乃ふ月る落る龍瞻　水

振袖乃羽織拵る露の上　水
ケまるる子細を関の明神　角
景清ゝ道のるるい夢もれ　同
もの巾着る小刺角折　水
分別るるる花を心を一立　同
扇をるる蝶のんを　角

笠を作りて幸嶋く
きしろけるかな那亭にて
体ひくるかな 無

神元のくれる深なん挿草小 珍夕

昼寝の惰さ抜ける蝉の
日数をしらべて別れを
問もいまも秋香

一夜ゆかしべと我翁
乃いつまでも今朝の秋
とまりんもちの秋意
ゆくすゑ一のまで多くれ 真角

筆をとる法師笠やうきの下涼
蟬なる声のうとしさ 粛山
いさく酔ほど只鶯を尺へ 影堂
立ち出る雲と着て外 角

引京ハ銀治うきめるとるが　山
まる栽（ウエ）飛うう模（ヲ）をしるる　同
盗人と吾名よりれん星の一る　棠
ゆうる甲撃もりめ法談　同
傘（カサ）やなとりうん初夏村雨の　角
紋見知しる君う提灯　同
うちゆうを行る思ひ　山
早欲ちゆうも心きうなる　同

死さのハ人ゆうき泡まて　棠
くまくさうす尾の升先　同
神るまへ初風さ雀の子　角
者ゆ形ゆう絶ますむ　同
万歳る身ハ不変春乃月　山
ゆ殿永ゆるかうまいん　同
十
二人ひかるうの鄭（ホウ）ぶり　棠
梶とゆ足乃惜きゆ毋　同

金箔ニ包まれぬ〳〵嵐寒し　角
まつる乃塔を成就して掛る　同
双六の石と簾との三十餘り　山
孝ある孫流るさらのむ古郷　同
横川まて多の薪ある菜の雨　棠
出家するなしく珍しく寝ん　同
うき月やむ流葉を承るゝ也　角
降そ分る　椿早梅　同

山里乃春を色さぬ京乃礼　山
母てふ節ほまあく初蝶　同
妥物をつるせぬるゝ花の雲　棠
遠侍る同ん艸乃名　同
はし〳〵鶉乃口すゝぐぬる溜り水　角
水なよとむ　蝶乃うゝ〳〵　山
今切しとことハる道るも暮て　角
是らとろしや白き食米　棠

呈餞

安房の海奉りきり汗拭　彫棠

そ遠

名残の海見て思へ西の海　肅山

豊後殿の舟の夜を　棠

みしらぬ花

六月十一日　卜宅

笑よなよ水乃粉ふる車僧

夕立はけふ乃池乃浮ひ　卜扇

節路の月をこぐなる息切　紫雪

袴（ツハトル）　袋せはよ平葦　宅

茅蒲牛乃恋寝ねせ　角

何うらふえ雪の関守　宰

遠命ゐる窓つまとる　宅
凡十分ゑひたる　盃　角
貧ゆゑ（ヘングエ）ゑ祐乗ゑ猿ハさしたる　京
変化とりゑ条作宰人　宅
夜の両焼食二つゑぎ〳〵せて　角
泣くまゑ祐ゑ　京
下駄ゑ結び后ゑ　宅
下役ゑ　角

乳房ゑ千鳥ゑ　京
名月ゑ酒むく人　宅
かくや姫ゑせとゑ　角
抛ゑ八こだま堂　京
蜂ゑ巣ハうるゑ　宅
一つ時責ゑ市馬　角
薬ゑ　京
なるゑ漆班（ウルシ）　宅

宮川うちぐるまの記　角
稽書より色さらる　刺刀　京
四ツ五ツあるを買せてあるを箱　宅
人を買せてあるを紙珠　角
色外なるを古郷　京
柄うちくくを扇をしぬ　宅
赤の料　中寺門さ　角
人くひ犬の吼ぬこの犬　京

灯どをせくを丈をさるを頬の皮　宅
うき恋流る所のる札　角
人もをきの群の花盗　京
遠巣　嶋巣の小鮎くせて　宅
甲斐歌やさやうの月　角
神さびうすむ　總一の宮　京

七月十三日

橋上吟　東文　且水

夕涼の湯屋の色ちまつり　亀翁

漂ひて

七月十九日半時　其角

役らはしく坊主辻々より迄れ撲

秋を涼しく畳　臺安　遠水

湯屋にて四ス新酒も拵　岩翁

下ゝの焼火も雲の月　角

州の戸鉄氷柱に寄て輾の音　水

市を問人て続くぬ町　翁

我方ヲ吉き佛御守（モリ）ヲ　角
家子仕ハぬを角のてき　水
白きゆる流を皆（ナカ）ぬかを見　翁
盲（メクラ）ゑる見ゆれ　前髪　角
こよひ又月ハを中ゆ舩の数　水
水施餓鬼　角れ松乃片淡　翁
鰹切る小磯る山を秋の風　角
貧おし〳〵かゝ三黒こ茶ら馬　水

我年ゆ白ゆ〇と娘ゆきみ出　翁
恋ゆ〳〵ゆ恋の家ゆ逆　角
玉城ゆ付て山ゆ八重の花　水
稲光の乃茶屋もちぬ雲の日　翁
うなひより乳母の恵む粽（チマキ）へ　角
見ゆ〳〵ゆく乳母　初蝶　水
暖簾を巻上ぬ〳〵花ゆ掃　翁
ゆ〳〵ゆ某とのひゆ某　角

同くハせる亦てまつする菓の酒　水
月ま義僧のもと乃名を向　翁
此度も遠の浦伝ひ　角
親も絶も沙ゐる閉戸　水
精ゝの椀ハ禁ゐる村の紙　翁
一藝ゐる人を感應　角
ものゝ氣の深入ぬる雪の声　水
春乃程さへ安ま世　翁

ものゝ屋の狸の穴とあるを　角
所ゝも変せ十のるゝ代子　水
雨氣つく日ま園炭もるまし　翁
物ゝ少るすするの門前　角
花時汝ものゝ人井戸ハ坂の下　翁
ゝゝ蠢く　水
やとりまの虫

偶興

秋風や板戸の開音　岩翁

送り火や経しらべ念仏の　乗翁

蕭々たる雨の窓　遠水

宗祇の長寿
ものしひやうし

仙化

亦一定荒涼までの夜寒哉

月はもとより庶の手節　手用

きりぎりすも近き梨を取て　百里

武士の名ある旅のすがひ　化

秤さへ関の東とかたるなり　角

いくつの家名ケモノ市　里

むさ〳〵とする〳〵き腐（トキ）と
くひる
人もしなむ墨を惜む史（モノナキ）　角

うちつけまこと〳〵男を　星
（ツメ）
青屋ゝ涙　飛ゝ藍色　化
いつとけて井の輪の氷柱つ色　角
（アシレタ）
曾志はし〳〵足履んめく　星
十分の盛をたんせんむの乳　化
焼（ヤキ）あて〳〵焦む山〳〵　角

釘〳〵建立〳〵る〳〵（もあり）　星
能乃大夫乃眼（まなこ）うる飛る　化
旅する歩る揚屋の月を　角
肌〳〵をさする　秋風乃　ゝ
新しい鰹なり〳〵流る紫　化
くろい潮よ　わゝ乳の形　角
村肝（キモ）乃喧嘩ハ時乃と　星
黒いろ〳〵と泣　化

あみよりもこ割り茶碗をつくること　角
斤よりあるる恋のあつひ　軍
はくくと我ふ事を花着（ダニリ）　化
夜乃火捕る船てぐ〳〵り　角
月雪も九方の切しを枕へく　軍
計立　翌よりの　赤のいとなこ　化
斤かなる聖乃文字と紙つけ（レヘリ）　角
年（バイ）まよくて奉りかるる　軍

地祭の竹の尾も常ある乃　化
鞠をとりて皆志つる也　角
十坊乃さ〳〵る門ハ鈴（レイ）の声　軍
玄の林を　鶏乃家　化
樂せんとおもひ旅乃花敷て　角
笑よるこそや山ハさめう　軍

花摘集　山田筍深跋

孝者德之基也儒家有孝經佛氏有恩重経母子之有親也懷老牛舐犢之愛沉斷猿叫子之恩猶羔有跪乳烏有反哺況亦於人乎于茲武陵晋其角元禄萬年之三四月佛生日遇母公之諱日偶詣石廟嘆戚頻起泣血横斜捻香摘英挑一灯咏一唫以供聖壽之追福積日渉月

向葉換百葉也今年慣摩耶報
恩之緒緣集一隻百吟名曰花
摘也記其傍者皆是助餘哀者
也嗚呼角子寄思風月游心滑
稽花中囀鶯唇枫林敲鹿腸遠
追祇公之薫業近汲芭翁之支
流兵闘國許之成世之棟梁噫
夫叔子有墮淚之碑其角有花
摘之集和漢雖易地其機亦一
也予閲其集感其情而採毫於

東武之旅寓

元禄庚午歳上秋下旬

其角撰　　寶井其角

一みなの　ふり　二冊
一陵みな　ふり　二、
一ちりの袋　二、
一花はみ　二、

書林西村載文堂

018

7438 625